

浄土真宗では「季節そのものは目に見えないが季節の方から私をそうだと思うせるはたらきがある」というおはなしをよく聞くことがあります。

例えば、最近私のお寺のご近所の金木犀がいい香りを漂わせ日に日に強くなってきておりますが、この香りがまさしく私に秋を告げるひとつのはたらきになっております。その他、気温の変化や木々の色の変化などもそうです。すべてわたしに秋を感じさせるはたらきかけです。そうなりますと私が今生きていること自体あらゆることからはたらきかけにより成り立っているのだと思わされたりします。このようなことを普段の生活の中でも自然に思えるようになってくるのも浄土真宗のひとつの特徴なのかもしれません。

さて、その浄土真宗をお開きになった宗祖親鸞聖人のご命日を偲び、改めてみ教えを聞かせていただく大切な行事である【報恩講】お取り越し法要が今月から徐々に各お寺で始まります。当院は11月22日(日)にを行う予定です。

親鸞聖人はたくさんの御

書物で阿弥陀如来の真実の救いのはたらき「他力本願」をお示しく下さいました。今回はその「他力本願」というお言葉のなかの一文字について【季刊せいてん】(本願寺出版社発行)という本を参照しながらご紹介いたします。

その一文字とは通常「なになにしがたい」という時は「難」という文字を使いますが、親鸞聖人は『教行信証』に通常「難」の文字を使うべきところにあえて七か所「叵」という文字を使われているそうです。一か所例文を挙げますと「ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく」の「がたい」を、現存している直筆で確かに「叵」の文字で書かれてあります。

この文字の成り立ちを辞書で調べてみますと「可の字を反対にして不可の意を表す」と書かれてあるそうです。つまり、先程の「難」という字をもっともっと難しいという意味の「不可能」と現している文字であった訳です。

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひ叵(がたく)」のお言葉の意味には阿弥陀如来の本願の救いに出遭うこと

の難しさを「不可能」のニュアンスで表現されたかった親鸞聖人のお心が窺えます。

そうしますと浄土真宗のみ教えには救いがないように思えてきませんか？ そのことに関してはきっぱり親鸞聖人は私たち煩惱をかかえた凡夫が救われる道は浄土真宗しかありえないとお示しく下さいます。親鸞聖人がおっしゃる凡夫とは、自分では助かる見込みのないもの(仏になれないもの)のことをいいます。この「救われようがないものが救われる」「不可能が可能になる」といった一件矛盾しておりますが、この不可思議の救いの話が浄土真宗の大切なところであり、お経を本にいろいろな角度から聞いてゆきます。何度も「必ず救う仏にさせてみせる」とおっしゃるお経のおはなしを聞くことによって阿弥陀様と私という関係に不思議と慶びを感じさせていただけます。その不思議な慶びをもたらすはたらきかけを「他力本願」といいこの「本願力」により苦しみの世を超えて行くという唯一のみ教えが浄土真宗です。

南無阿弥陀仏